

青年期における異性との友人関係の発達

大井由莉菜・宮本正一

(岐阜大学教育学研究科・岐阜大学教育学部)

キーワード : 青年期 異性 友人関係

Development of friendship with opposite sex in youth

Ohi, Yurina (Graduate School of Education, Gifu University)

Miyamoto, Masakazu (Gifu University)

問題と目的

私たちは生きていく中で、たくさんの友人と出会う。友人に悩みを相談したり、仲間集団に属することで、私たちは精神的安定を得ることができる。また、友人とのつきあいの中で、自分自身を見つめなおすことができ、自分を精神的に向上させたりすることもできる。このように、私たちは友人と温かい関係を築いたり、あるいは葛藤を経験する中で、さまざまなことを学び成長していく。

青年期における友人関係は、幼児期や児童期に比べ、より重要性を増す。青年期は、依存的で親中心であったそれまでの時期と違い、親から独立し、自己の形成や自立性を確立する時期であり、青年期における第2次性徴などに伴う急激な心身の変化や親からの独立は、不安や恐れを伴い、そのため青年は「悩みや考えを語り合う同世代の友人が必要になる」(榎本, 1999)。

そして、青年期前期には両親が中心であり、次第に同性の友人が中心的地位となってきて、そして、青年期の終わり頃からは、「異性の友人が中心的な自己開示の相手となる」(安達, 1994; 榎本, 1987)。このことから、異性の友人や恋人は重要な存在になってくる。

榎本(1999)は、同性の友人との付き合い方の発達の变化の研究を行った。その結果、男子は友人と遊ぶことを中心とした「共有活動」から「相互理解活動」へと変化し、女子は友人との行動や趣味の類似性を重要視した「親密確認活動」から他者を入れない固い絆をもった「閉鎖的活動」へと変化し、その後「相互理解活動」

へと変化することが分かった。また、男女は「相互理解活動」に至るまで、友人とそれぞれ異なった経験をするが、最終的には同じ「相互理解活動」の関係になることも明らかにされた。

青年期の友人関係は青年を支え、青年の成長とともに変化していく関係であるが、その友人とは、「同性」に限られたものではない。「異性」との友人関係も、青年期を通してどのように変化していくのかを検討することは青年の発達を考えるうえで重要だと考えられる。そこで、本研究では、中学から高校、そして大学になるまで、発達に伴って異性との友人関係にどのような変化があるのかを明らかにすることを目的とした。

友人関係における発達の变化 榎本(1999)は、中学生から大学生を対象に、青年期の友人関係を友人との「活動的側面」と友人への「感情的側面」に分け、それぞれの発達の变化とそれらの2側面の関係を明らかにしている。調査は質問紙で行い、それらを因子分析した結果、友人関係の活動的側面においては「相互理解活動」、「親密確認活動」、「共有活動」、「閉鎖的活動」の4因子が得られた。さらに、活動的側面の4因子と性別、学校段階との関係をみるために各因子について、性別(2)×学校段階(3)の分散分析を行っている。その結果から、「共有活動」は男子に多く、「相互理解活動」、「親密確認活動」、「閉鎖的活動」は女子に多くみられることが示された。また「親密確認活動」、「共有活動」、「閉鎖的活動」は中学、高校生で多く、「相互理解活

動」は大学で多いという発達的变化がみられた。一方、友人関係の感情的側面においては、「信頼・不安」、「不安・懸念」、「独立」、「ライバル意識」「葛藤」の5因子が得られた。そして、活動的側面と同様、分散分析を行っている。その結果、「ライバル意識」、「葛藤」は男子が強く感じている、「信頼・安定」、「不安・懸念」は女子の方が強く感じていることが示された。また、「ライバル意識」は中学生で強く、「不安・懸念」は中学、高校生で強く、「独立」は大学生で強いという発達的变化がみられた。

この活動的側面と感情的側面の関連は、「共有活動」は全体的に主に「信頼・安定」と関連しており、その中でも高校男子は「ライバル意識」の低さと関連し、高校女子は「葛藤」と関連している、友人との遊びを中心とした活動の中には、誘いを断りたいのに断れずに遊んでいる感情を含んでいるといえる。「親密確認活動」は、「信頼・安定」、「不安・懸念」が全体的に関連していたが、中学女子では「信頼・安定」のみが関連しており、中学女子にとって表面的な類似性が友人関係にとって安定感のみをもたらしていることを示している。「閉鎖的活動」は、男子については「信頼・安定」の他に、中学生は「葛藤」、大学生は「不安・懸念」とも関連していたが、高校生は男子も女子も「信頼・安定」のみと関連していた。「相互理解活動」は、男女ともどの学校段階においても「信頼・安定」、「独立」が関連していた。その他に関連する感情として、男子については、中学生で「不安・懸念」、高校生で「葛藤」が、女子については、中学生で「葛藤」、高校生、大学生で「不安・懸念」の感情が関連していた。要するに、男子は友人と遊ぶことを中心とした「共有活動」から「相互理解活動」へと変化し、女子は友人との行動や趣味の類似性を重要視した「親密確認活動」から他者を入れない固い絆をもった「閉鎖的活動」へと変化し、その後、「相互理解活動」へと変化している。また、男女は「相互理解活動」に至るまで、友人とそれぞれ異なった経験をすが、最終的には同じ「相互理解活動」の関係になると考えられる。

異性の友人 安達 (1994) によると、青年における意味ある他者の研究を行った際、態度・価値の形成に関わる他者の検討のために「その人から注意・忠告されるとこたえる」という人、葛藤の解決・自己安定に関わる他者の検討のために「悩みなどを相談できる人」などの回答を求めた。その結果、異性の友人や恋人が上位に挙げられた。また、安達 (1994) によると、青年期前期には両親が中心であり、次第に同性の友人が中心的地位となって、青年期の終わり頃からは、異性の友人が中心的地位となるという。これらのことから、異性の友人は、重要な存在になっていくのではないかと考えられる。

異性ととの友人関係 富重 (2000) は、異性ととの人間関係における研究で、大学生を対象にした青年期における異性不安と異性対人行動の関係について調査している。その結果、まず、恋人がいないと答えた群は異性不安が高く、年齢の近い異性きょうだいがいると答えた群は、異性不安が低いことが分かった。異性不安は異性に対する積極的な行動を抑制するだけでなく、異性ととの日常的相互作用を含めた異性対人行動全般に抑制的な影響力をもつことが明らかにされた。そして、異性とよい人間関係をもちたいという気持ちが強く、異性ととの良好な人間関係への期待が高い人ほど、異性に対する積極的な行動を多く行うことが分かった。

この結果から、恋人がいる人や異性の兄弟がいる人は、日常的に異性に関わる環境にあることから、恋人や兄弟以外の異性に対しても、あまり抵抗を感じないため、異性不安が低いのではないかと考えられる。

青年期の友人関係は、青年を支え、青年の成長とともに変化していく関係であり、同性のみならず、異性ととの友人関係も青年期を通してどのように変化していくのかを検討することは青年の発達を考えるうえで重要だと考えられる。本研究は、異性ととの友人関係が青年期を通してどのように発達していくのかを検討することである。

【仮説】

- ①男子よりも女子の方が、年齢が上がるにつれ、異性に対する積極的な行動を多くするようになるだろう。
- ②女子よりも男子の方が、年齢が上がるにつれ、異性に対する親和指向の強さが高まっていくだろう。
- ③異性のきょうだいがいない群は、異性のきょうだいがいる群に比べて、中学生・高校生・大学生において、異性不安の高さに差があるだろう。

方 法

調査対象者 岐阜県内の公立中学生170名 (男73名・女97名)、高校生119名 (男73名・女46名)、大学生172名 (男43名・女129名) の計461名 (男189名・女272名)

質問内容 富重 (2000) の作成した尺度をもとに作成した質問紙を用い、調査を行った。それぞれの尺度は次に記すものであった。

異性不安尺度 異性不安とは、特に青年期に顕著となる、全般的な異性との相互作用において不安や緊張感を経験する傾向であり、異性に対する苦手意識や被抑制感といった否定的認知を伴う心理特性である (富重, 1999)。富重の作成した9項目(異性にものを尋ねるのが苦手だ など) を用い、各内容につき自分がどの程度当てはまるかを6段階で評定した。

異性対人行動に関する項目 日常的に行われる異性対人行動13項目 (雑談をする など) それぞれにつき、日常的にどのくらいの頻度で行うのかを6段階で評定した。

異性に対する親和指向に関する項目 本研究では、異性に対する親和指向を「異性とよい人間関係を持ちたいという気持ちや、異性に対する関心の強さ」と定義し、「異性に対する親和指向」(同性の友人よりも、異性の友人の方をもっと増やしたい など)、「経時的比較によって評価された親和指向」(高校の時と比べて、異性のこと

を強く意識するようになった など)、「他者との比較によって評価された親和指向」(同性の友人と比べて、異性と会話するのが好きな方だと思うなど) の3側面から測定する。各項目につき自分がどの程度当てはまるかを4段階で評定した。

将来の異性との相互作用に対する肯定的期待に関する項目 (将来期待) 将来、異性との良好な相互作用・人間関係を確立することができるかどうかについての肯定的な期待の強さを測定した (自分は、異性から好かれる存在になるだろう等)。

以上についての質問42項目に回答を求めた。また、他に性別、学年、好きな人の有無、異性きょうだいの有無の回答も求めた。

結 果

調査の結果、異性きょうだいのいる人は、計206名 (内、中96名、高45名、大65名)で、いない人は計183名 (内、中72名、高45名、大66名)であった。そして、好きな人がいる人は計171名 (内、中41名、高25名、大105名)で、いない人は計225名 (中123名、高56名、大46名)であった。

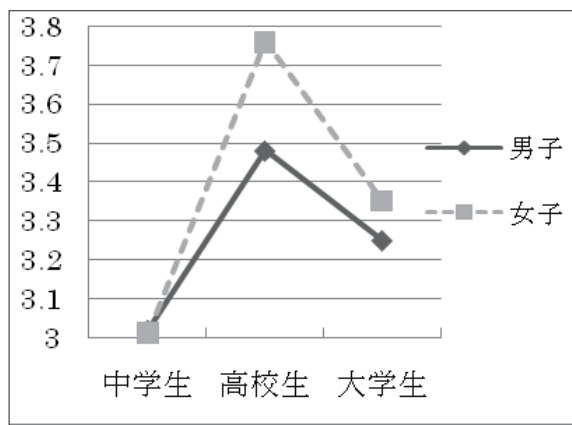


図1 異性不安の平均

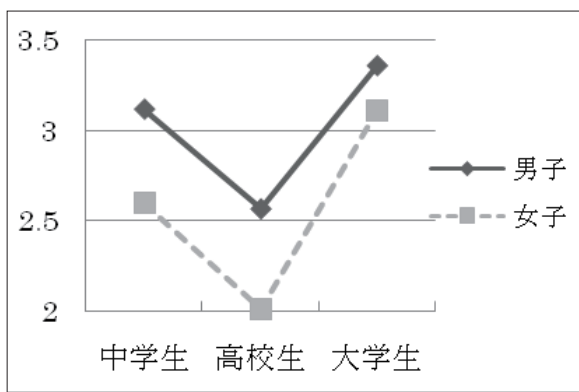


図2 異性に対する日常的行動の平均

それぞれの尺度に関して、因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行った。その結果, 異性対人行動に関しては「異性に対する日常的行動」因子, 「異性に対する積極的行動」因子の2因子が得られた。異性に対する親和指向に関する項目については, 「現在の親和指向・他者比較によって評価された親和指向」因子, 「経時的比較によって評価された親和指向」因子の2因子が得られた。

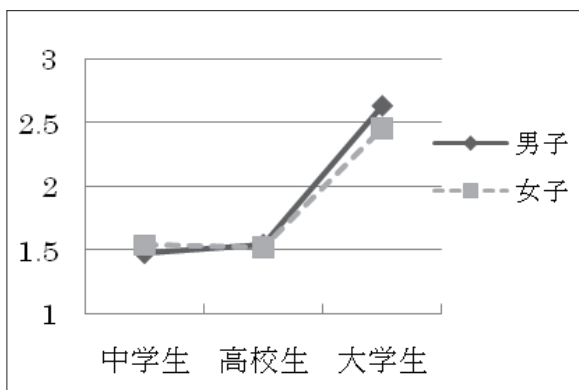


図3 異性に対する積極的行動の平均

それから, それぞれの尺度得点が, 発達, 性差, 異性きょうだいの有無, 好きな人の有無によってどのように異なるかを検討するために二要因の分散分析を行った。

発達と性差 図1より, 異性不安においては高校生が一番高く, また, どの学校段階においても女子の方が異性不安は高かった。分散分析の結果, 発達差にのみ有意差があった ($F[2,455]=17.45, p<.01$)。主効果の多重比較の結果, 高校生の平均 (3.53) と大学生の平均 (3.34) の方が

中学生の平均 (3.01) より有意に高く, 高校生の平均の方が大学生の平均より有意に高かった。

図2より, 女子はどの学校段階においても男子より異性に対する日常的行動の頻度が低かった。分散分析の結果, 発達差 ($F[2,455]=22.92, p<.01$) と性差 ($F[1,455]=14.59, p<.01$) それぞれに有意差がみられた。主効果の多重比較の結果, 中学生の平均 (2.82) が高校生の平均 (2.62) より有意に高く, 大学生の平均 (3.19) が中学生の平均と高校生の平均より有意に高かった。

図3より, 高校生から大学生にかけて, 積極的行動の頻度が高くなっていることが分かった。分散分析の結果, 発達差において有意差がみられた ($F[2,455]=74.33, p<.01$)。主効果の多重比較の結果, 中学生の平均 (1.51) と高校生の平均 (1.78) の間に有意な差はなかったが, 中学生の平均と高校生の平均より大学生の平均 (2.53) が有意に高かった。

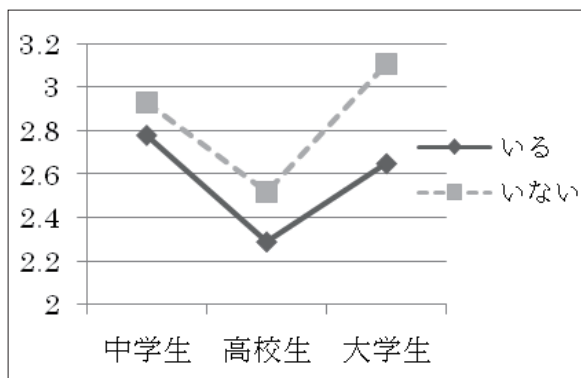


図4 異性に対する日常的行動の平均

発達と異性きょうだいの有無 図4より, どの段階においても, 異性きょうだいがいない人の日常的行動の平均が高いことが分かる。分散分析の結果, 発達差 ($F[2,383]=5.97, p<.01$) と性差 ($F[1,383]=5.10, p<.05$) にそれぞれ有意差がみとめられた。主効果の多重比較の結果, 高校生の平均 (2.42) より中学生の平均 (2.83) の方が有意に高く, 高校生の平均より大学生の平均 (3.07) の方が有意に高く, 中学生と大学生の間に有意差はみられなかった。

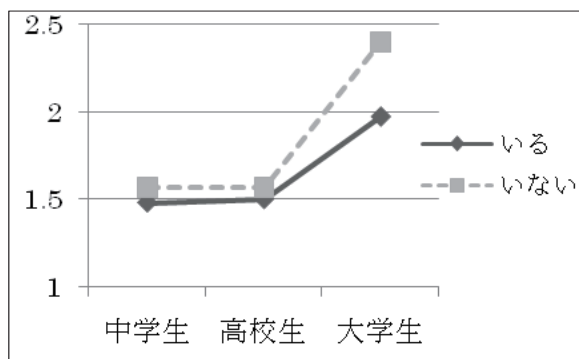


図5 異性に対する積極的行動の平均

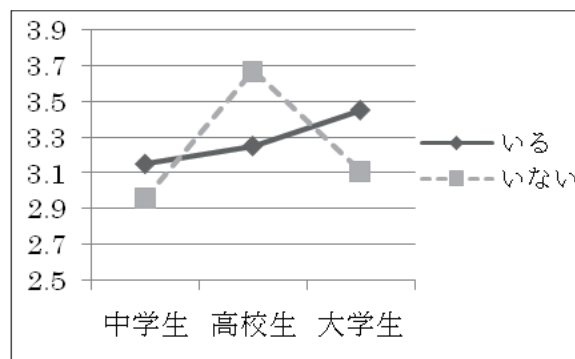


図7 異性不安の平均

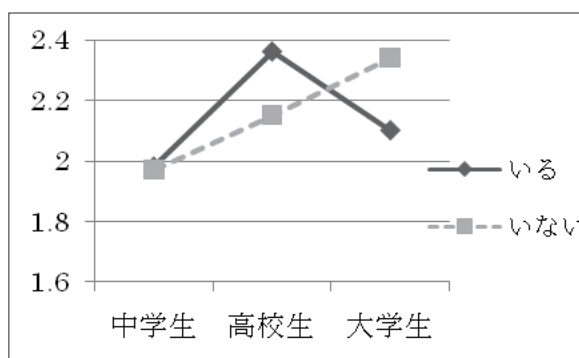


図6 経時的比較によって評価された親和指向の平均

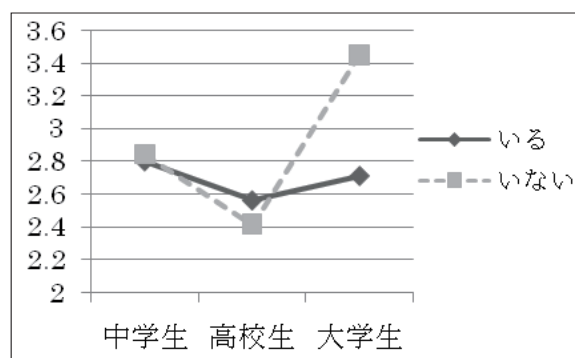


図8 異性に対する日常的行動の平均

図5より、異性きょうだいがいる人もいない人も、大学生になると積極的行動の頻度の平均が高くなっている。分散分析の結果、発達差 ($F[2,383]=29.53, p<.01$) と性差 ($F[1,383]=6.23, p<.05$) にそれぞれ有意差がみとめられた。主効果の多重比較の結果、中学生の平均 (1.92) より大学生の方 (2.39) が有意に高く、高校生 (2.17) より大学生の方が有意に高く、中学生と高校生間に有意差はみられなかった。

図6より、中学生においては異性きょうだいがいる群もいない群もほとんど差はなかった。高校生になると、特に異性きょうだいがいる群が急激に上がり、いる群といない群の間に差が生じた。そして、大学生になると異性兄弟がいる群は下がり、いない群はそのまま右上がりになっていた。高校生においては、異性きょうだいがいる群の方が高かったが、大学生ではいる群の方が低いという結果になった。分散分析の結果、発達差に関しては、有意差がみられた ($F[2,383]=5.09, p<.01$)。

発達と好きな人の有無 図7より、好きな人がいる人は右上がり異性不安が高くなっているが、好きな人がいない人は山型のグラフとなっていることが分かる。分散分析の結果、交互作用 ($F[2,390]=5.81, p<.01$) がみられたので、各水準ごとに単純主効果を分析した結果、好きな人がいる群では発達差がないが、好きな人がいない群では発達差が有意 ($p<.01$) であり、好きな人の有無に関しては、高校生では好きな人がいない群の方が異性不安が高く ($p<.05$)、逆に、大学生においては好きな人がいる群の方が異性不安は高かった ($p<.05$)。また、多重比較の結果、好きな人がいない人において、高校生の平均 (3.67) が中学生の平均 (2.96) より有意に大きく、高校生の平均が大学生の平均 (3.11) より大きく、中学生と大学生の平均の間には有意差はみられなかった。

図8より、中学生においては、好きな人がいる人と好きな人がいない人の間には、ほとんど差はなかった。高校生になると、好きな人がい

る群もいない群も下がり、いる群といない群で中学生よりも差が生じた。大学生になると、好きな人がいない群は急激に日常的行動の頻度が上がり、好きな人がいる群も上がるが、中学生よりも低かった。特に大学生において、好きな人がいる群といない群の間に大差があることが分かった。交互作用に有意差 ($F[2,390]=3.81, p<.05$) がみられたので、各水準ごとに単純主効果进行分析した結果、好きな人の有無に関しては、大学生においてのみ有意 ($p<.01$) であり、好きな人がいない群の方が異性に対する日常的行動が高得点であった。また、多重比較の結果、好きな人がいない群では、大学生の平均 (3.45) が中学生の平均 (2.84) より有意に大きく、大学生の平均が高校生の平均 (2.41) より有意に大きく、中学生の平均と高校生の平均の間に有意差はみられなかった。

考 察

本研究の分析結果から、発達差においては、異性不安、異性に対する日常的行動、異性に対する積極的行動、異性に対する親和指向と他者比較によって評価された親和指向、経時的比較によって評価された親和指向、将来期待、すべてに有意差がみられた。

中学生は、同世代の友人を求め、男子は遊ぶことが中心で、女子は友人との類似性に重点をおいた関係を築いている (榎本1999)。このことから、中学生は同性の友人が中心的な存在であり、異性の友人との関係はあまり重要視していないため、異性不安が低いと考えられる。富重 (1996) は、中学生と高校生を対象に異性不安の高さを調査しているが、その結果、中学生より高校生の方が異性不安が高くなっていた。本研究での調査結果も、富重の調査結果と同様であった。中学生より高校生の方が異性不安が高いのは、不安傾向が異性との相互作用からの回避を動機づけ、異性と関わる機会を逸し、更に不安が助長されるため (富重, 1996) だと考えられる。高校生から大学生にかけて減少しているのは、大学生になるとコミュニティが多様化し、知り合いが増え、そうした環境の中で自分を軸にして友人関係を築いていく (中上ら, 2007)

ので、それまでのように合わない人ともつき合うということはなく、自分と価値観が似た人を選んでつき合っていけばよいため、異性不安は低くなっていくと考えられる。

異性対人行動に関しては、高校生よりも中学生の方が、日常的行動をする頻度が高かった。富重 (1996) は、異性不安を感じるほど異性のクラスメイトとの交友を阻害する、また、異性不安傾向が異性との相互作用の回避を動機づけ、異性と関わる機会を逸するということを明らかにした。このことから、異性不安が異性との日常的行動を抑制するということがいえる。よって、高校生の方が中学生より異性不安が高かったため、異性との日常的行動の頻度は中学生より高校生の方が低かったのだと考えられる。中学生と高校生のように異性不安の高さと日常的行動の頻度に関連があるならば、中学生より異性不安が高い大学生の方が、日常的行動の頻度は低いはずである。しかし、中学生よりも大学生の方が日常的行動の頻度が高いのは、大学生になると、コミュニティの多様化により異性との関わりが増え、その中で自分と価値観などが合う人を選択して付き合っていけばよいため (中上ら, 2007)、学校やクラスという枠が強い中学生より日常的行動の頻度が高いと考えられる。異性に対する積極的行動に関しては、中学生から高校生にかけては大差はないが、大学生になると急激に頻度が高くなっている。日常的行動は、異性不安の高さと関連していたが、積極的行動については、異性不安の高さは関係ないといえる。また、中学生において、異性との日常的行動は高校生よりも頻度が高かったが、異性との積極的行動に関しては、高校生とほとんど頻度は変わらなかった。異性との対人行動でも、日常的行動と積極的行動では、発達的变化は異なることが分かった。

異性に対する親和指向と他者比較によって評価された親和指向、経時的比較によって評価された親和指向、将来期待は、発達と共に高まっていくことが分かった。これは、年齢が上がるにつれ、異性の友人を求めるようになる (榎本2000) ため、異性との関わりを求めたり、異性とのよい人間関係を築くことができるだろうと

思う気持ちが強くなっていくことを示していると考えられる。

性差については、分散分析の結果、異性に対する日常的行動、異性に対する親和指向と他者比較によって評価された親和指向に有意差がみられた。

異性に対する日常的行動に関して、女子より男子の方がどの学校段階においても日常的行動の頻度が高かった。中学生と高校生において、異性不安の高い女子は異性との日常的行動の頻度が低く、一方、女子より異性不安が低い男子は、異性との日常的行動の頻度が女子より高くなっていった。川名ら(2007)は、対人アプローチの男女比較を行っている。対人的アプローチとは、自己開示や身体接触のことであり、相手が同性の場合、アプローチの度合いに男女差はないが、相手が異性の場合には女子より男子の方がアプローチの度合いが有意に高いことが明らかにされた。対人アプローチは、本研究での異性に対する日常的行動と類似したものだと考えられる。このことから、女子より男子の方が異性との日常的行動をする頻度が高いということが考えられる。

異性に対する親和指向と他者比較によって評価された親和指向に関しては、中学生と高校生は、異性との関わりを重要だと思っていたり、他者と比べて異性に対する関心が強いと認識しているなどというのに対して男女間で差はほとんどないのに対し、大学生では男女間に有意な差がみられた。富重(2000)の研究では、男子より女子の方が高く、それは女子より男子の方が同性間での自己開示が少ないため、他者比較が行われなからだとされている。今回の結果では、女子より男子の方が高いという結果が得られた。それは、因子分析の結果、因子が2となってしまう、第1因子の内容が他者比較によって評価された親和指向と異性に対する親和指向が混じったものであったので、このような結果になったと考えられる。これらのことから、異性に対する親和指向が特に女子より男子の方が高かったため、第1因子全体として女子よりも男子の方が高くなったのだと考えられる。

発達と異性きょうだいの有無 異性きょうだいの有無に関しては、「異性不安」、「異性に対する日常的行動」、「異性に対する積極的行動」に有意差がみられた。異性きょうだいがいることイコール異性に対する免疫が、異性のきょうだいがいない人よりもあり、抵抗が少なく済むため、異性不安を抱きにくく、異性との対人行動の頻度が高いと予想していたが、本研究での結果は違っていた。異性不安、日常的行動、積極的行動、すべてにおいて異性兄弟のいない群の方がいる群よりも高いという結果が得られた。よって、異性のきょうだいがいても、異性不安を抱きにくいことや対異性の対人関係に抵抗が少ないとはいえないことが分かった。

発達と好きな人の有無 好きな人の有無に関しては、まず異性不安について、高校生の場合は好きな人がいない群の方が高く、大学生の場合は好きな人がいる群の方が高かった。そして日常的行動については大学生において、積極的行動についてはどの学校段階においても、好きな人がいる群よりいない群の方が頻度は高かった(図3)。これは、好きな人がいると、その相手との関わりを重視しようとするため、他の異性との関わりが減ってしまうからだと考えられる。また、好きな人がいると答えた人の中で、その相手が恋人である可能性がある。そのため、恋人という存在がいるため、他の異性との関わりを避けたり、異性との関わりに制限が生じるということが出てくると予想される。これも、好きな人はいる群よりいない群の方が頻度が高いという結果になった原因のひとつだと考えられる。一方、好きな人がいないという人は、恋人の存在を意識することなく他の異性との関わりができるので、好きな人がいる群よりもいない群の方が頻度が高かったと考えられる。また、好きな人がいない群は、異性とよい人間関係を築きたい、異性と知り合うチャンスを必ず生かすことができるといった将来期待が高いため、実際に日常的行動の頻度も高くなっているのだと考えられる。

仮説の検証

仮説1「男性よりも女性の方が、年齢が上がるにつれ、異性に対する積極的な行動を多くするようになるだろう」については、異性対人行動に関する項目を因子分析した結果、第2因子であった「異性に対する積極的行動」因子の平均は、以下のようであった。

	男子	女子
中学生	1.48	1.54
高校生	1.55	1.52
大学生	2.64	2.46

表1 「異性に対する積極的行動」因子の平均

この表1や図3を見てみると、男子は学校段階が上がるにつれ、平均も上がってきているが、女子は中学から高校にかけて下がり、大学になると上がっている。また、中学生・高校生においては発達面でも男女間でも大差はなく、高校生から大学生にかけて急に上がり、女子より男子の平均の方が高いという結果になった。また、分散分析の結果から、発達の方では有意な差があり、男女間に有意な差はなかった。よって仮説1は支持されなかった。

全体的に女子より男子の方が平均が高かったのは、「異性と一緒にいるときに内気になる」、「異性との関わりが苦手だ」というような異性不安が、女子より男子の方が低いためだと考えられる。また、富重(2000)の研究で、異性不安が異性に対する積極的な行動を抑制するということが明らかにされたが、今回の結果からも異性不安が関連しているため、このような結果が得られたのだと考えられる。

仮説2「女性よりも男性の方が、年齢が上がるにつれ、異性に対する親和指向の強さが高まっていくだろう」については、異性に対する親和指向に関する項目を因子分析した結果、2因子が得られたが、表2、表3はそれぞれの因子の平均を示したものである。

	男子	女子
中学生	1.67	1.58
高校生	2.12	2.18
大学生	2.44	2.10

表2 異性に対する親和指向と他者との比較によって評価された親和指向の平均

	男子	女子
中学生	2.01	1.94
高校生	2.21	2.23
大学生	2.45	2.29

表3 経時的比較によって評価された親和指向の平均

異性に対する親和指向に関する項目を因子分析した結果、2因子が得られたが、第1因子の「異性に対する親和指向と他者との比較によって評価された親和指向」因子も第2因子の「経時的比較によって評価された親和指向」因子も、男子は学校段階が上がるにつれ、平均が上がっている傾向が見られ、仮説は支持されたといえる。よって、女子よりも男子の方が、「異性と話がしたい」、「これから異性とよい関係を築いていきたい」という親和指向が高く、それは日常的行動と関連性があると考えられる。異性との関わりを望んでいるため、日常的行動も女子より男子の方が多いいえる。

仮説3「異性兄弟無群は、有群に比べて、中学生・高校生・大学生において、異性不安の高さに差があるだろう」については、まず、異性不安の平均を示したものが次の表4である。

	男子	女子
中学生	3.11	2.89
高校生	3.76	3.42
大学生	3.39	3.37

表4 異性不安の平均

分散分析の結果からは、発達では1%水準、異性きょうだいがいる群といない群では5%水準で有意な差があることが分かった。ここで、異性きょうだいがいる群といない群でそれぞれ、中学生と高校生間、高校生と大学生間、大学生

と中学生間の差を出してみた。異性きょうだいがいる群では、中学生と高校生間は0.65、高校生と大学生間は0.37、大学生と中学生間は0.28で、異性兄弟がいない群では、中学生と高校生間は0.53、高校生と大学生間は0.05、大学生と中学生間は0.48であった。よって、いる群においてもいない群においても、中学生・高校生・大学生で異性不安の高さに差はあまりないといえるので、仮説は支持されないといえる。異性のきょうだいがいれば、他の異性に対しても抵抗なく話したり、振る舞ったりできると予想していたが、いる人ほど異性不安が高いという結果が得られた。

本研究から、性別、好きな人の有無別では、大学生になるにつれ、異性対人行動の頻度が高まっていくということから、学校段階が上がるにつれて異性が中心的存在になっていくことがわかった。そして、異性きょうだいがいることが、異性不安を抱きにくいことや対異性との対人行動に抵抗を持たないことにつながるとはいえなかった。

本研究のまとめ

本研究では、異性との友人関係の発達の変化を検討してきた。その結果、異性不安は、男女別、異性兄弟の有無別、好きな人の有無別にみると、好きな人有群以外は、高校生において一番高かった。また、対人関係においては、高校生の頻度が一番低かった。よって、異性不安の高さが異性との日常的行動を抑制する傾向があると考えられる。また、積極的行動については、男女別、異性兄弟の有無別、好きな人の有無別でみたところ、大学生で急激に上がっていることが分かった。そして将来期待に関しては、中学生から大学生にかけて、徐々に高まっていくことが分かった。親和指向に関しては、傾向がばらばらであった。

高校生において、異性不安が高く、日常的行動が低かったのは、高校生は同性の友人から異性の友人へと中心的存在が変わり始める時期であるため、異性との関わりに不安を抱き始め、その不安が異性との日常的行動を阻害したのだと考えられる。

大学生において、積極的行動が急激に高まっていくのは、大学生になると、コミュニティの多様化により、人間関係、特に異性との関わりが広がっていくためだと考えられる。

今後の課題

本研究では、異性の友人との関係について質問紙で回答をしてもらったが、その中で、「普段よく一緒にいたり、よく話をしたりするような、あなたが親しいと思っている異性の友達を思い浮かべてください」という記述があった。しかし、普段よく一緒にいたりよく話したりしなくても、たとえば、小学校から大学生まで学校は違うけれども、連絡を取り合ったり時々会ったりして、ずっと繋がっている、親しい友人といえる存在がいる場合もある。また、難波(2004)は、対人関係には数種類の関係性が含まれていて、友人関係といってもその内容は多様であるため、一括りにはできないのではないかと述べている。つまり、学校の中、バイト先、部活動やサークルの中で親しい友人は変わり、親しさもそれぞれ違ってくるため、親しい友人を「普段よく一緒にいたり、よく話をしたりするような友人」と限定することはできないのではないだろうか。

異性きょうだいの有無を把握するため、家族構成を記入してもらった。今回は異性のきょうだいの有無と発達に関して分析を行ったが、富重(1995)は、異性きょうだいの有無のみでなく、いると答えた人に更に、そのきょうだいの仲を否定的に捉えているか、肯定的に捉えているかの回答を求めている。その結果、異性きょうだいのいる人で、きょうだいの関係を否定的に評価している人ほど異性不安が高いことが明らかにされた。また、それは男女共通であった。このように、異性きょうだいの仲の評価によって異性不安の高さに差が出ているため、特に本研究のように調査対象が多い場合は、異性きょうだいの有無のみでなく、異性きょうだいの関係の評価を行った方が、より研究を深めることができるだろう。

また、好きな人の有無の回答も求めたが、「好きな人がいる」と答えた人の中には、その相手

が片思いの相手であったり、あるいは恋人であったりする人もいるはずである。青年期になると、対人関係の中心が徐々に恋人になり、恋人が重要視されるということ (Buhrmester & Furman 1987; Furman & Buhrmester 1985), 異性との1対1の交際をしている人は、そうでない人よりも有意に異性不安得点が低かったということ (富重, 1996) が明らかにされているように、好きな人でも、その相手が片思いであるか恋人であるかで異性不安の高さなどが違ってくると考えられる。また、女性より男性の方が恋人から支えてもらっていると感じている (Furman & Buhrmester 1922) というように、男女でも違いがみられる。また、多川・吉田 (2002), 多川 (2003) は、友人や恋人の対人関係観を自分のものとして取り入れる傾向があることを明らかにしている。このことから、異性の友人であるか恋人であるかによって、対人行動が違ってくると考えられる。

今後、このような点を検討していくことで、研究を深めていく必要がある。

引用文献

- 安達喜美子 1994 青年における意味ある他者の研究—とくに、異性の友人 (恋人) の意味を中心として— 青年心理学研究, 6, 19-28.
- Buhrmester, D. & Furman, W. 1987 The development of companionship and intimacy. *Child Development*, 58, 1101-1113.
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本淳子 1997 青年期の友人関係の発達的变化 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, 144.
- Furman, W. & Buhrmester, D. 1985 Children's perceptions of the relationship in their social networks. *Developmental Psychology*, 21, 1016-1024.
- Furman, W. & Buhrmester, D. 1992 Age and differences in perceptions of networks of personal relationships. *Child Development*, 63, 103-115.

- 川名好裕・斎藤勇・山際勇一郎 2007 対人アプローチの男女比較 日本社会心理学会第48回大会発表論文集
- 中上英和・加藤陽子・菅野純 2007 青年期における友人関係の学校段階からみた変化—回想インタビューを用いた質的研究— 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 440.
- 難波久美子 2004 日本における青年期後期の友人関係研究について Vol.51, 107-116.
- 多川則子・吉田俊和 2002 親密な人間関係が対人関係観に及ぼす影響—青年期の恋愛関係と友人関係—, 対人社会心理学研究, 2, 65-73.
- 多川則子 2003 恋愛関係が青年に及ぼす影響についての探索的研究—対人関係観に着目して—, 名古屋大学大学院教育発達科学科紀要 (教育科学), 50, 251-267.
- 富重健一 1995 異性不安をめぐる環境・動機と異性対人行動(1) 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 90.
- 富重健一 2000 青年期における異性不安と異性対人行動の関係—異性に対する親和指向に関する他者比較・経時的比較の役割を中心に— 社会心理学研究, 15, 3, 189-199.